令和７年度　図画工作科実践・研究計画

部　員	○三浦茉子、大森果歩

１　昨年度の成果と課題

昨年度の実践を通して、図画工作科における自律した学習者の姿が見えてきた。

①　１年「ふしぎなせかいでみつけたよ～くもにのって～」の題材では、活動の流れに沿って自然な形で鑑賞が行われるように、学習形態を少人数のグループにした。ある程度表現を進めて、活動が止まっていた子どもが、教師と向かいの友達との対話の様子を見聞きして、自分の表現に取り入れようとする姿が見られた。また、グループで向かい合っていた子ども二人のうち、一人はお菓子の世界を、もう一人は遊べるところがたくさんある世界を想像していた。互いに「ここは…な場所でね」「このブランコは…」などと自分の想像した世界を語り合うことでさらに想像が膨らんでいくという様子であった。近くのグループの友達が渦巻き型の雲を作っていた様子を見て、自分でも作る子どもが現れるなど、自然に鑑賞と学び合いが生まれ、表現の自己決定に刺激を与えていたと言える。子どもが自らの目的に応じて自由に使える白画用紙を教室前方に置くという場づくりも行った。子どもたちは、紙を取りに移動する間に、他のグループの友達の作品を鑑賞したり、友達と対話したりしていた。このような場の工夫の成果として、子どもが必要としている造形的な気付きを、その子にとって必要なタイミングで得られたことが挙げられる。子どもの表現活動の流れを止めることなく、自然な形で発展させていくために、学習形態や場づくりといった工夫が有効であったと考える。

②　２年次から継続して、子どもとの対話を大切にした実践を行ってきた。前述した１年「ふしぎなせかいでみつけたよ～くもにのって～」の題材においても、子どもが想像したことを聞き出すような問い掛けを試みた。学習が始まって間もない時は、「雲に乗ってどんな世界に行きたいかな」「何を見たいかな」といった問い掛けに、反応が鈍い子どもたちであった。しかし、「雲にどんなポーズで乗りたいの」「誰と行きたいの」など、自分を主人公として考えることを促す問い掛けや、「これはどんな○○なの」「どんなところが不思議なの」などとより詳しく想像することを促す問い掛けから、子どもが自分なりの物語を紡いでいく姿が見られた。画用紙に花をいくつか描いた後活動が止まっていた子どもには、「雲の上のお花なんて、素敵だね」と共感の言葉掛けをすると、他にも花を描き加えていく姿が見られた。色とりどりの花が咲く空の世界という想像がさらに広がり、自信をもって表現し始めた姿と言える。このことから、子どもが表したいことを見付け想像を広げるために、教師が問い掛けたり、表現に共感する言葉掛けをしたりするという対話の在り方が有効であったと考える。

③　昨年度までの鑑賞と対話の成果は、子どもが表したいことを見付け、想像を広げることにつながったことだと言える。しかしそのことに留まり、造形的な視点で子どもの表現力を育むことまでは至らなかったと考える。鑑賞や対話をする際に、「形や色、奥行き、バランス」などの造形的な視点に基づいた問い掛けを行うなど、表現を工夫していく子どもを育むための手立てを探っていきたい。

こうした成果と課題を踏まえ、図画工作科における自律した学習者の姿を次のように捉える。また、自律した学習者が育つ授業デザインの具体的な取組を次のように設定する。

２　図画工作科における自律した学習者の姿

①　形や色などに関わる造形的な気付きを自ら獲得し、表現につなげる姿
②　表したいことに対して、物語を紡ぐように想像を広げていく姿
③　造形的な視点に基づき、自分なりの意図をもって表現を発展させていく姿

３　授業デザインの具体的な取組

○自分にとって必要なタイミングで造形的な気付きを獲得できる場づくりをする。
○想像を広げていく助けとなるように対話する。
○造形的視点に基づいて、表現の意図を尋ねたり、表現や鑑賞の活動を価値付けたりする。